

BOOK REVIEW 1

メイキング・オブ・ピクサー —創造力をつかった人々—

デイヴィッド A. プライス 著, 櫻井 祐子 訳
早川書房 ISBN-13: 978-4152090164 2009 年発行
評者: 金谷一朗 (大阪大学)

ジョン・ラセターとギリシャ哲学

告白する。私はアリストテレスを馬鹿にしていた。

ピクサーの映画は、そのどれもが本当に素晴らしいものだ。子供だけでなく、大人までも虜にするピクサーの映画は一人の天才監督、ジョン・ラセターだけによって紡ぎ出されるわけではない。ストーリーは何ヶ月も、ときには何年も練り直される。天才的なひらめきがストーリーに加えられることはあっても、ベースとなる理論は変わらない。アリストテレスは「詩学」でこう書いている：すなわち喜劇が現代の人間より劣った人間の再現を狙うとすれば、悲劇はそれよりすぐれた人間の再現を狙うのである。(アリストテレス著、松本仁助・岡道男訳「詩学」) 自然科学の「敵」と決めつけていたアリストテレスが、神と運命の支配するギリシャ文学の中でここまで冷徹に劇(ドラマ)を分析していたことに私は驚く。

「メイキング・オブ・ピクサー」はストーリーの裏側に流れるギリシャ哲学の水脈までも汲み取る(本書 p.192)。

エド・キャットムルと glutSolidTeapot

「カールじいさんの空飛ぶ家」を見た。といっても、映画のことではない。カールじいさんの家の模型である。その完璧に作り込まれた模型は、ピクサー・アニメーション・スタジオの目立たない場所に飾られている。映像として決して使われることはないが、これほど雄弁に映画を語っているものはない。ピクサーでは、デジタルなモデルを作る前に、フィジカルなモデルを作る。それは見本ではなく手本なのだ(なぜ私がこのことを知っているのかと言えば、ピクサーを訪問し、アートディレクターの堤大介にインタビューする幸運に恵まれたからである)。

フィジカルなモデルからデジタルなモデルへどのように移行させるか。本誌の読者であれば、例えばピクサーが映画公開と前後して、ACM SIGGRAPH でレンダリング技術を発表するのをしばしば耳にされただろう。同社が映画会社として成功し、学術集団としても最先端を行くのは、社長にして、ゲークの中のゲーク、エド・キャットムルがいればこそである。彼は Z バッファリング、テクスチャマッピング、双 3 次曲面レンダリングの発明によって、「その後何の功績も残さなかったとしても、コンピュータ・グラフィックスの分野で不朽の名声を博していたはずだ。」(本書 p.30)

本書は、エド・キャットムルを主人公に据えている点で、

他のピクサー本とは一線を画している。キャットムルはユタ大学でコンピュータ・サイエンスを学んだ。当時のユタ大学はアリストテレスの時代のアテネと呼んでも差し支えないほどの才能を生み出している。もちろん、ユタ・ティーポットも生み出されている。

スティーブ・ジョブズとジョージ・ルーカス

“Stay hungry, stay foolish.” アップル・コンピュータ共同設立者スティーブ・ジョブズが 2005 年にスタンフォード大学で行ったあまりにも有名なスピーチの最後の台詞である。

ピクサーが、元々はルーカスフィルムの特特殊効果部門だったことをご存じの読者も多いだろう。現在のピクサーをジョージ・ルーカスから買い取ったのは、ジョブズであることもまた有名であろう。しかし、彼が自ら創業した会社を追われるという人生のどん底で、しかも 60 億円もつぎ込んだとなれば、フリーッシュも度が過ぎるというものだ(確認のために、私はインダストリアル・ライト・アンド・マジック社も訪問した!)

本書はまた、最高に楽しいジョブズ本(もはや一つのジャンルであろう)でもある。ピクサーのファンでなくても、アップルのファンでなくても、単純に、もう一人の主人公が演じる劇(ドラマ)を楽しむことが出来る。劇と言っても、著者デイヴィッド・A・プライスはジョブズに負けない完璧主義者のようだ。

参考文献の引き方、インタビューの数は、考古学、歴史学系の学術論文に匹敵する。

訳書にあたるときは、原著も読むのが評者としての責任である。というわけで、私は原著 Pixar Touch の Kindle 版を iPhone で読んだ。ジョブズが作ったマシンで、ジョブズについて書かれた本を読んだのである。もちろん、ピクサーのショートフィルムも iPhone に納めてある。まったく、ジョブズ漬けである。

私の願いは、読者がいてもたってもいられなくなり、今すぐに「メイキング・オブ・ピクサー」を手を読み始めてもらうことである。科学と芸術がここまで融合するものかと、息をのむことを保証する。ただし、この本を読む前に「カールじいさん」をご覧になることをおすすめする。種明かしは後回しのほうがよい。ちなみに、「カールじいさん」を見るのなら 3D 版がおすすめだ。液晶シャッター眼鏡をかけていれば、こっそり泣いても気づかれぬ。

